

---

# Fate/stay night IF

時雨に鳴く狐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / s t a y   n i g h t   I F

### 【コード】

N 0 9 9 4 N

### 【作者名】

時雨に鳴く狐

### 【あらすじ】

これはもしもIIFの物語。もしもあの時。聖杯戦争勝利者ではなく、別のだれかに少年が拾われていたらー。彼の少年は救われていたのではないだろうか。これは、そんなもしもを叶える物語。本作は二次設定、妄想設定が盛り込まれています。苦手な方は回れ右で。サブ作品なので、更新不定期なうえに亀更新だと思われま。作者の原作知識はSSと二次創作で得た知識しかありません。間違えがあったら指摘していただけると嬉しいですよ。

## 燃える世界（前書き）

### 警告

あとがきには本作の今後のネタバレが多少書かれています。ネタバレが嫌いな方は読まないことをオススメします。ネタバレ

## 燃える世界

世界が燃えている。

呼吸をすれば、肺が焼けるような熱を持つ大気。真っ赤に燃える大地。崩れ落ち燃え散る建物。炎の中で燃えている黒いナニか。

やはり、世界は燃えている。

どこにも救いのない世界を、ひとりの少年が歩いていた。

目は虚ろで足取りはおぼつかない。背中を少し押しやればすぐに倒れてしまいそう。

けれど少年は歩く。どこまで歩けば助かるかなんて考えていないだろう。少年を動かしているのは生存本能ただひとつ。生きたい、この気持ちのみが少年を動かしていた。

死んだ魚のように、ふらふらと世界を歩く。

この子を助けて、と黒く燃え尽きたナニかが差し出された。

助けてくれ、と今まさに燃えてしまっているヒトに助けを乞われた。

自分に差し出されたナニかも、差し伸ばされた手も、すべて切り捨てた。

そのたびに少年の口から出る言葉はひとつ。

ーごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

何回も何回も囁きながら歩を進める。

少年はわかっていたのだ。差し出されたナニも、差し伸ばされた手も、自分が取っても助かることはない、と。ゆえに切り捨てた。切り捨てるしかない、と、思考の定まらない中、そう考えた。

歩みをまたひとつ進める。進めていく。生きるために。

ひとつ進めるたびに声が聞こえる。

ー痛い。苦しい。憎い。熱い。辛い。助けて。生きたい。死にたくない。

呪詛のようにも聞こえる声を無理やりシャツアウトしながら歩く。歩く。歩く。

そして、ついに限界がきた。いや、とつくの昔に限界なんてやってきていたのだ。少年が気づかなかっただけで。

ばしゃりと血溜まりの中に倒れた。水たまりみたいだと、ぼんやりと思った。

空を見上げた。夜なのか、朝なのかもわからない赤黒い空。凝固した血みたいな空。

空も地面も血、血、血。そして、視線を少し横に動かせば黒い太陽。

アレを見た瞬間、アレはニンゲンが見ていいモノではないと思った。アレはこの世にあつてはならないモノだと思った。アレから今すぐにでも逃げたいと思った。

けれど無理だ。この場から離れることは叶わない。逃げたいといくら思っても、身体が動かない。心が言うことを聞いてくれない。どちらも限界なのだ。身体は疲労で、心は諦めで。

自分は死ぬのだろう。こんなところにまでだれも助けにくることはない。両親は死に、双子の妹も死んでしまっただろう。そして、今から自分も死ぬ。死ねばめでたく家族に会える。それならば死ぬことも良いことだと思えた。

もう目を開けているのも辛くなってきたその時。足音がした。だれかが歩いてくる。

死神が迎えに来たのかと視線を向ければ、そこにいたのは黒衣に身を包み、首から金のロザリオを下げた男だった。黒衣に身を包んだ男は死神に見えたが、そうではないのはロザリオを見ればわかる。死神がそんな物つけているはずはないし、つけているとしても極一部の人間のみだ。つまり、目の前に現れたこの男は神父だろう。だが、その男を見て神父と自信を持って言えるかと聞かれれば、万人が答えるのを躊躇うはずだ。死んだ魚のような目が、無機物の機械のような目が、そう思わせる。

首から下がっているロザリオを見てやっと神父だと言える、そんな男がこちらを感情のない目を向けながらやってきた。

少年の元に来た黒い神父が口を開く。なにを言われるのかと少し興味を惹かれた。謝罪か、死亡宣告か。それとも――。

「ふむ。――聞こう、少年。きみは生きたいかね」

それを聞いた時、人間が現れて、安心してしまったのか。暗くなつていく意識の中で、無意識に口が動いた。なんと言ったのかは覚えていない。

けれど、その時の本能は紛れもなく――。

## 燃える世界（後書き）

えー、やってしまった感がMAXですね。はい。双子ってなんだよって感じですよ。はい。ネギま！を書かないでなに書いてんだって話ですよ。バカですね。はい。

この内容は昔から妄想はよくしていたのですが、文字にすることがなかった作品です。読んでわかったと思いますけど、本作の土郎くんはエセ神父に引き取られます。そこから始まる土郎くんの日常と非日常を書いていきます。金ピカが居て、暴食王が居て、毒舌シスターが居て、土郎くんが居る（エセ神父はわかりません）、そんな日常と聖杯戦争のある非日常をかけたらいいなと思います。

本作をよろしくお願いします。

## 小さな非日常と大きな日常（前書き）

### 警告

あとがきには本作の今後のネタバレが多少書かれています。ネタバレが嫌いな方は読まないことをオススメします。ネタバレ

## 小さな非日常と大きな日常

そこはカーテンが閉められて薄暗い部屋。存在する家具は机に  
す、ベッドにクローゼットとタンスのみ。そんな寂しい部屋。

ベッドにある膨らみがもぞりと動いた。最初は小さく。次からは  
次第に大きく。その光景から睡魔と戦っているのは想像に容易い。  
ピタリと動きが止まった。そして、数秒の間を置き、ノロノロと膨  
らみが持ち上がる。

まず目に飛び込んでくるのは赤い髪。赤いと言っても真っ赤とい  
うわけではない。ほんの少しだけ銀色が見える。割合にして1割程  
度。もしかすると1割にも満たないかもしれない。

起き上がった上半身を大きく伸ばしているのは言峰士郎。あの悪  
夢のような火災から生き残った少年。赤毛とやる気の見えない瞳が  
特徴的な半人前の神父兼高校生。

(……またあの夢、か)

今は見慣れた――昔は見るたびに養父に泣きついた――夢を見て、  
朝から顔をげんなりさせた。小さくため息を吐いて、憂鬱な気持ち  
を吐き出す。

一時期は見るものがなくなった夢をまた見るようになってから、  
すでに3年の月日が経っている。理由はわかつている。手の甲に現  
れた令呪と近いうちに始まるであろう戦争のせいだろう。そのせい  
か、最近は非常に夢見が悪い。

寝間着に使っていた服を脱ぎ捨て、いつもの洋服に着替える。黒のズボンに同じく黒のカッターシャツ。薄手の黒い手袋をはめて。暗い紫のコートは着ないで持つだけ。そして、5年前に他界した言峰綺麗の形見であるロザリオを首から下げれば、言峰士郎のできあがり。

変わらない自分に少量の満足感を得て、朝食を作るために部屋を後にした。

士郎が朝食はなににしようか悩んでいた時だった。

「シロウ、腹が減ったぞ」

やって来たのは言峰家の暴食王である小柄な少女。くすんだ金髪に、白いを通り越して青白く見える肌。黒いゴスロリ服を着ていることを無視すれば、病弱の少女に見える。しかし、見えるだけだ。その小さな身体のどこに入るんだ、と聞きたくなるくらいに食べる。1に食事、2に食事、3、4が飛んで5に食事。と言う言葉を体現しているのが、アルトリア・アーサー・ペンドラゴン。またの名を、剣の英霊・セイバー。

「ちょうどよかった。なにか食いたいモノでもあるか？」

士郎は聞いてから後悔した。この少女はよく食べるくせに食事に偏りがある。好きな食べ物ハンバーガーと即答するようなニンゲンである。まともな答えなど期待できるはずもなく。

「そうだな、ハンバーガーが食べたいぞ」

返ってきた言葉は予想した通りの言葉だった。

アルトリアの言葉を頭の中から削除して、朝食は無難にパンとサラダに目玉焼きでいいだろうと決める。アルトリアは食事に偏りはあるが好き嫌いはいわない。土郎の隣で無視をするな、と騒いでいるが、朝食が完成すればおとなしくなるだろう。

「おい、そろそろカレンとギルを起こしてきてくれ」

朝食の完成が間近になり、おとなしくなって配膳を手伝っていたアルトリアに声をかける。アルトリアは文句を言うこともなく素直に従って、起きてこないふたりを起こしに行った。

配膳が一通り終わったテーブルを見て土郎は軽く息を吐いた。時計を確認すると、すでに5分は経っていた。カレンを起こすのに手間取っているのだろう。あれは朝は低血圧で、起こすのに苦労したのを土郎は覚えている。

「おはようございます、マスター」

「おはよう、ギル」

先に起きてきたのは10年来の親友。金の髪を持つこども。見た目はこどもだが、雰囲気がかどものソレではない。アルトリアと似た雰囲気を持っている。つまり、このこどもーギルガメツシュもアルトリアと同じ存在。すなわち彼も英霊である。弓の英霊・ギルガメツシュ。またの名を、最古の英雄王・ギルガメツシュ。

「カレンはまだ起きないのか？」

士郎の言葉にギルガメツシュは苦笑いをした。ギルガメツシュもカレンの寝起きの悪さを知っている。アルトリアが苦戦しているのを想像して苦笑いをしたのだろう。

「そろそろ来ると思いますよ。ですから冷めないうちに食べたましようよ」

ギルガメツシュの提案を受けて時計を見ると、ギルガメツシュが来てから何周か長針が回ってしまっている。これではせつかくの朝食の味が半減してしまうと思い、頷こうとしたその時だった。部屋に絶対零度の声が響いたのは。

「ほう、私を置いて先に食べるというのか。言い残す言葉はあるか？ 英雄王」

声を発したのは、家族の中でもっとも食事に関するさいアルトリア。その声を受けたのは、提案を出したギルガメツシュ。

ギルガメツシュが冷や汗を浮かべる。まずいと本能的に悟ったのだろう。いつも顔に浮かべている微笑みがぎこちない。

「い、イヤだなあ。セイバーさんを置いて先に食べるわけないじゃないですか」

乾いた笑いを上げる、ギルガメツシュ。殺気の籠もった瞳で睨みつける、アルトリア。

その光景を視界に収め、アルトリアが食事のことで殺気を飛ばす

のはいつものことだと内心でため息をひとつ吐いた。

「おい、朝からそんなに殺気を飛ばすな。胃に悪い。カレンも遅いし、先に食べば問題ないだろ」

アルトリアの空腹も我慢の限界だと思い、士郎はギルガメッシュを助け出してやることにした。なにしろ先ほどからアルトリアの腹から早く食わせると猛抗議が聞こえてくる。これを無視し続けたら自分にも飛び火すると、彼はちゃんとわかっているのだ。

「……………次はないと思え、英雄王」

部屋に漂っていた緊張感とアルトリアが飛ばしていた殺気が四散した。

士郎は朝からどっと疲労が溜まったような気持ちになった。訓練をして多少は慣れているとはいえ、受けていて気持ちの良いものではない。それが英霊のものならなおさらだ。

「はは……………、肝に銘じておきます」

額に流れていた冷や汗は引いたが、表情はまだぎこちない。訓練や戦闘では英霊として圧倒的な力を見せてつけているが、普段の生活ではアルトリアにはかなわない。それが食事のことならなおさらだ。

アルトリアの機嫌も直り、ギルガメッシュの冷や汗も止まり、そろそろ朝食にありつこうとした時だった。士郎が重要なこと（アルトリアにとって）に気がついたのは。士郎としてもこのことを言うのは心苦しいが、アルトリアのためには言わなくてはならない。

「お前らが騒いだせいで飯が冷めたぞ」

そのあとすぐに、アルトリアがギルガメッシュを睨んだのは言うまでもなく。アルトリアに睨まれたギルガメッシュが冷や汗を流したのも言うまでもない。

士郎たちが冷めてしまった朝食を食べ始めてほんの少し時間が経った時だった。言峰教会の最後の住人が現れたのは。

「おはようございます、兄さん。起こしに来てくれないなんて、ひどいですね」

くすんだ銀髪と金眼を持ち、修道服に身を包んでいる少女は、毒舌シスターことカレン・オルテンシア。寡黙な印象を受ける少女だが、寡黙なのは印象だけだ。この少女の特技が毒舌だということは周知の事実である。

「おはよう、カレン。なに言ってんだ、アルトリアが起こしに行きただろ」

「わかってないですね、兄さん。アルトリアに起こされるのも悪くないですけど、兄さんのやる気のない瞳を見て目覚めなくなる日があるんですよ」

「……………おい」

半眼でカレンを睨みつけるように見る。その士郎の反応に満足したのかカレンは満足そうに自分の席（4人用のテーブルで士郎の左

側だ。ちなみにギルガメツシユは土郎の前で、アルトリアがその隣だ）に着いた。

その様子にため息を吐いた。この反応もカレンを楽しませるモノだとわかっていても吐きたくなつた。ちらりと横目で見てみれば、予想通り上機嫌になつていた。

土郎は思う。この性格はだれに似てしまったのか。間違いなく自分ではない。10年前から存在するギルガメツシユでもない。3年前から家族になつたアルトリアでもない。消去法で残るのは、5年前に他界した父親である言峰綺麗のみ。この男で当たりだろう。言峰綺麗という男は、他人の不幸がなによりも好きな人間だつた。それはもう、他人の不幸があれば生きていけるのではないかと思わせるほどだ。娘であつたカレンが、多少なりとも感化されてしまったのだろう。綺麗ほどひどくはないが。

(……まったく、余計な置き土産を残してくれる)

今は天国か地獄に居るであろう(地獄だろうが)父親に、恨みの電波を送る。落ち込むどころか元気になるとわかつていても、送らずにはいられない。

静かな部屋に食器の音と咀嚼する音が響く。言峰家は基本的に食事中はだれもしゃべらない。その空気は重苦しいモノではなく、心地の良いモノで。土郎は気に入っている。

時間が経てばその音も次第に聞こえなくなっていく。最初は4人で奏でられていた音もひとつ、またひとつと消えていく。最後に食べ終わった土郎が食器を置き、音が完全に消えた。

「相変わらず兄さんは食べるのが遅いですね」

「まったくだ。こんなに遅いのなら、ハンバーガーにしたらいいのを」

「しょうがないですよ。マスターはそういう人ですから」

「……うるさい。ほっとけ」

カレンが言葉を発し、アルトリアが自分の願望を混ぜ、ギルガメツシュがヒトの良い笑みを浮かべ、士郎がバツの悪そうな顔になる。

いつもの光景で、いつものやり取り。士郎の心を癒してくれる光景で、やり取り。大きな日常の中に小さな非日常があるが、コレがいつも通り。コレが平和な日常。

言峰家は今日も平和です。

## 小さな非日常と大きな日常（後書き）

お久しぶりです。最後に投稿したのが8月17日なので約1ヶ月ぶりの投稿ですね。いやー、こんなにも遅れてしまって申し訳ないです（それ以上にネギま！が遅いんですけどね^^;）。

今話は主要キャラクターとなる言峰家紹介の回でした（エセ神父は死んでますけどね）。ちゃんと特徴を捉えられているといいのですが……。Fateの二次小説は初めて書くのでそこがすごく心配です。間違っていたら報告してくださるとうれしいです。

アルトリアの名前の表記にはふたつの理由があります。ひとつは士郎くんたちにとって『家族』だからです（ギルガメッシュは、第四次聖杯戦争でセイバー呼びに慣れてしまっているからです）。もうひとつの理由は今は言えません。今後の展開に関わってきますので。

カレンが低血圧なのは、作者の趣味です。低血圧で家族に起こされる女の子って萌えませんか？いずれ起こしているシーンを書きたいです。

ギルガメッシュがこどもverなのも作者の趣味です。おとなverも好きなんですけど、番外編でない限り動かしにくいんです。自分の中ではギャグ要因です。

次話から本編開始です。序盤は原作に沿うようにしようと思っ  
ているので、展開が読みやすいと思います。読まれてしまっても退屈  
しないようがんばります。

本作をよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0994n/>

---

Fate/stay night IF

2011年10月7日03時07分発行